

ここに帰る

和田重正に学ぶ会

題字 和田重正

ここに帰る

第八十九号

令和八年四月一日発行

目次

『あしかび』 二十一号

和田 重正

自分

兎と亀

写真 ある日の一心寮

まみ子 昭和四十九年六・七月合併号

まみ子夏・柏樹社十周年記念大講義集 2

講演 「山岡鉄舟」

大森 曹玄

まみ子 昭和四十九年九月号

白い杖 怒り

くも 「国に理想を」…ネホサの提案

和田 重正

西湘まみ子会通信

文明の害は防げるか

手書き未定稿

至福

和田 重正

後記

表紙写真

今開かんとするリンゴの蕾

長野県松川町上片桐

撮影 平澤正義

44 43 37 31 30 11 10 7 2





2 1

発行人 はじめ塾 和田重正
印刷人 大畑 喜美子
昭和三十五年十一月十一日

日曜の話 十一月六日

自 分

この前二回は、人間（自分）とはなんだろうという話をしました。はじめ、えらい勢いで話しはじめましたが、途中から息が続かなくなって、たとえ話みたいなことにして、おしまいにしてしまいました。しかしあれを読んでくれた人は、なんとなく私の考えている人間というものを感^じ取^って下さったことと思います。つまり一言で言えば、人間（自分）というものは内^{たば}から見るとい^いのち^であ^って、外^かから見ると欲望の束であるといったようなことです。それから、その欲望について少し説明しました。しかし

それだからどうしなければならぬ、という教訓を垂れるつもりはむろんないのです。ただそういう事実を知ってもらいたいだけなのです。それから先は、めいめいどのよう^にでも判断すればいいのです。

さて、今日は全然別の話をしようと思うのですが、やはりこの話も行く先は自分とはなんだろうという問題につながってしまいました。

私の尊敬しているある偉い人が先日雑誌にこんなことを書いておられました。

地球上に今人間が三十億いるとすると、自分がどんなことを考えたって叫んでみたって人類の運命に対してどれだけの影響力があるだろう。三十億粒のうちの小さな一粒でしかない自分を考えるとき、何をしたって儂^{はかな}いものように思える。もし自分をそれだけのもの^としか考えられないならば、何をする張り合^いもなくなってしまうはずだ。それだのに事實は、私は人類の運命^ということを夢中で追求している。それは、自分^というものは実は単に三十億分

の一だけのものではなく、かえって自分自身の中に全人類の問題があるのだ。三十億分の三十億という自分があるのだと自ら感じているからである、と。

これは非常にむずかしい話の中の一部分ですし、ことに後半は何のことかみんなにはわからないだろうと思います。そこでもっとやさしい話をしましょう。これは私が昔からよくする私の作り話です。

東京から大阪まで歩いてきたら百万円あげるといふ懸賞があつて、東京から大阪までは丁度十万歩かかるたら一歩いくらだろう、というクイズです。

二十五年ぐらい昔から今まで、時々中学生にこのクイズを出してみました。恐らくこれに答えた人は数百人にのぼるだろうと思います。そして答の90%は「十円」でした。あとの10%は答えなかった。答えた人は、 $100分 \div 10分 = 10$ と計算したのだろうと思ひます。そしてなるほど、この計算は違つていません。しかしこの答はどうみても事実合つていません。もしこの答が正しなら、例えば箱根口あたりの一歩が十円、三歩で三十円ということになるはず

です。ところがそんなところの一歩は十円にはなりません。タダです。十万歩全部揃つて百万円になるのです。それだからまた、十万歩を完成したときをもとにして言えば、もし一歩でも足りなかつたら百万円がファイになるところです。だから一歩百万円の値打があるとも言えるでしょう。しかもどの一歩もその意味では同価値です。この見方からすると、百万円の一歩が十万歩並んでいて、それで合計百万円になるといふ奇妙なことになります。いくら奇妙でもさうなのだから仕方がありません。ですから、私はこのクイズの答は0と百万円が正しいのだと思ひます。では0と百万円とどっちの方が正しいのかというと、どっちも正しい。けれど片方だけではいけない。つまり、「0と百万円」という一つの答になるのだと思つたのです。

さっきの「十円」の答はどこに間違いがあるのでしよう。それは「百万を十万で割ると十」という答が出る」といふ法則に間違いはないのですが、その数の法則をこんなところへ適用しようとするのが間違

いなのです。ピタゴラスの定理を使って円の面積を計算しようというふうなものです。われわれは、このように法則を適用する場合を間違えて混乱を起こしていることがたくさんあります。(何主義によらず何かの主義にこり固まった人は必ずこの過ちを犯しているものです。このことについては、いつかお話ししたいと思います)。

丁度この百万円の話と同じような間違いを犯した大蔵大臣が戦争中にありました。なんとという人だったか忘れませんが、その人がラジオで演説したのです。

「この聖戦を勝ち抜くためには一億の国民が総力をあげて戦わねばならない。みなさん一人一人が一億分の一の責任を負っているのです。どうかみなさん、一億分の一の責任を自覚して最後まで頑張ってください」

私たちはそれを聞いて、なんだか気が抜けたような感じになりました。あの戦争全体の重味を全身に感じながらも、負けるもんかと歯を食いしばって毎日を堪えていた私たちは、なんとなく馬鹿にされたような実感を覚えたものです。

この大蔵大臣は国民が一億人いるから一人の責任は一億分の一だと思っていたのでしようが、それは法則の適用の誤りでした。この責任も一人一人が「〇と同時に全部」を負っているというのが本当だったと思います。でもあんなアジ演説のときには「諸君一人一人に全責任がかかっているのである」とやればよかったのだと思います。このことは、どんな団体でも同じです。一家五人の家族があったら、その家庭をよくしていく責任は一人が五分の一でなく、みんな〇と全責任があるわけです。

これらのことは、法律上連帯債務という考えがあります。それと半分だけ似ています。五人の連帯債務一万円といえ、五人ともめいめいが一万円の借金があるということ、一人二千元ずつの債務ではないのです。つまりみんなに全部の責任があるのですが、法律の場合は〇の方はありません。だから半分似ているといったのです。

さっきから私は「〇と全部」とよく言いますが、「〇と全部なら〇を省いて全部だけでも同じではないか

と算数でつくりあげたみなさんの頭は考えるでしょう。しかしそうはいかないのです。実はこの〇があるからこそ個人個人に自由があり、あらゆる変化の可能性があつて、創造のよろこびはみなこの〇から出てくるのです。これを省いた事実などはあり得ませんし、また思想でもこの〇を無視して組み立てられた思想は一応強力ではあつても、まことに味気ない人生を強制することになります。その理由は今説明できませんが、みんなは物事ものごとの実際の実実を正しく見れば知ることができます。(これもみんなが大人になったら話してあげられるかも知れない)。

さて、こんどは話をかえて……

あそこに、きれいに紅葉した柿の木があります。あの柿の木と私とは無関係だろうか。目をつむってごらん。日本中のどこかで今赤ん坊が生まれている。どこかでは、老人が今息を引きとった。教会では再度お祈りをしている。ロンドンは今、夜中の一時です。街には酔っ払いもいなくなつて、どこかの邸に

ピストル強盗が押入っています。さういう、赤ん坊、老人、お祈りしている人、ロンドンの強盗と私とは無関係でしょうか。そんな遠くのことではなく、ここに坐っている君と私、あなたと私とは本当のアカの他人でしょうか。たしかに、親子でも兄弟でもないからアカの他人に違いありません。それも本当です。

しかし、全然別の見方もできるでしょう。私はさつきじじみの味噌汁を食へました。じじみは消化され、もうじきに私の中から一部分になるでしょう。そのしじみは川で何を食へて育つたのでしょうか。多分死んだ魚のかげらや藻の一部などを食へたのでしよう。その魚は何を食へ、その藻は何から栄養分を摂取して育つたのでしょうか。

こんどは逆に、一匹の牛が死んだらどうなるか考えてみましょう。肉は多くの人間に食われ。一部は犬にも食われるかも知れない。皮やその他のいろいろな部分はそれぞれ何かに使われ、結局、肥料になつて植物のからだを作る材料になるものもあるでし

よう。その植物を馬が食うかも知れない。その人間や、犬や植物や馬がどうなるだろう。百年もたたないうちにみんなバラバラになってどこかで何かになっているだろう。このように一匹の牛の行方を追求して行くと忽ちたちまちにして無限の拡ひろがりの中に吸いこまれていってしまいます。人間でも、柿でもみな同じです。

物質がどんな形で移動するのかよくわからないが、分子とか原子という単位として考えてみると、今の私の中からだを作っている物質は想像もできない広い範囲から寄り集まってきていることが想像されます。その一部はロンドンから、他の一部はブラジルから、また昨年君のからだの一部であったものもあるだろう。三年前あの柿の葉だったものが今私の一部になっているのもあるだろうし、その逆の関係の部分もあるだろう。

こんなことをホンの短い日時について考えてみても、驚くほどの広い範囲のものが互いに交流し合っていることがわかります。それが何万年何億年の間

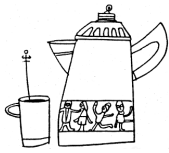
の交流を考えたら、太平洋の底の一尾のエビとでも南極にいるバクテリア一箇とでも私と縁つづきでないものはない。いや、縁つづきというと、別々の感じがありますが、もつと境目のない間柄であるというのが本当でしょう。みんな共同の材料を譲り合い、分け合って、私というものができたり柿の木というものができたりしているだけです。全く面白いものですね。これが事実なのだから愉快なことです。味噌と糞とにけじめがないのです。君も僕もありやしない。何が菊だ、何が桜だ。——

これが事実の一面です。だからといって、まさかクソ汁は食べられない。私がいくら勉強しても君は偉くはならないし、君の口にごはんを食べさせても私の腹はふくらまない。桜の枝に菊は咲かない。——これもまた間違いない事実です。

このように事実というものは、「〇と全部」とか、「無差別と差別」という全然反対のことを同時にそなえているものです。どっちを見落としても事物を正し

く理解しているとは言えません。一つの事物の中に
こういう正反対と考えられることが同時に矛盾なく
具わっている、ということは、ちょっと不思議なよ
うな面白いことではありませんか。いや、事物など
とひとごとのようなことを言わず、自分というもの
がそんな不思議なものであるとは、なんと不思議な
ことでしょう。

はじめにも言ったように、私はこの話をして最後
で、「だから人類はみな兄弟である。だからお互いに
愛し合わなければならぬ」などと教訓を垂れるつ
もりは全くないのです。ただ私はみんなに、自分と
いうものやこの世界というものに目を向けさせ、そ
れについて考える手がかりを与えたいと思っただけ
なのです。



■おとなのページ

(投稿歓迎)

兔と亀——道徳教育

新聞に出ていた本の広告か何かを読んでいると、
こんな話があった。

ある小学校で先生が兔と亀の競走の話を通りした。

一つは、普通の通り、兔が眠っている間に亀がそ
のわきを通って行って亀が勝った、という話。次に
は亀が兔を起こしてやったために亀が負けた、とい
うことにした。

そこで先生が児童たちに「みなさんはどっちの亀
が好きですか」と聞いたたら、大部分の子どもは後の
亀の方が好きだ、と答えた。

「ではあなたが亀だったらどうするか」ときいたら、
こんどはほとんどのものが「前の亀のようにする」
と言ったということです。そしてその広告か何かには
「同様な矛盾があらゆることごとについてわれわれ

の心の中にあるのだが、この辺に道徳教育の出発点があるように思う。」

といった意味のことが書いてありました。

この話は、今から五、六年も前に、高良とみ女史がソ連へ行ってモスクワのある小学校を参観したとき、求められてその子どもたちに日本のおとぎ話の一つとして例の兎と亀の話をしたところ、社会主義道徳に馴らされているソ連の子どもたちは、不思議そうな顔をして質問したのです。

「どうして亀は兎を起こしてやらなかったのですか？」

と。この質問を受けて高良さんは困ってしまっただが、後で考えてみて、なるほど大へん感心してしまっただ。この話からヒントを得てどこかの先生が思いついたことだと思えます。

(この高良さんの話を聞いて、私も足をすくわれたような気がして、当時大へん感心しましたので、そのことを何かに書いた憶えがあります。)

さて、はじめ塾のみなさん、それからお母さん、

お父さん方、この話を読んでどんな感想をお持ちになりますか。

兎を起こしてやって堂々と実力で勝負しようという兎は、勝ち負けにこだわらない一種の理想主義者であり、黙って足音をしのぼせて横を通り抜ける兎は功利的現実主義者だと一応言えるでしょう。

前者はまた没我的であり、後者は自己中心であるとも言えます。

こんなふうには、あることばを使って亀の行為の性質を抽象的に理解してみると、なんだか勝負に負けることを承知で兎を起こしてやった亀の方が善良なように聞こえます。それは、理想主義とか現実主義とか自己中心的とかいうことばに道徳的評価がついているからでしょう。

しかし、そう簡単に言い切れるものでしょうか。はなはだ疑問だと思えます。

競走をしようということに意見が一致して、はじめた競走の途中で寝込んでしまうような横着者をわざわざ起こしてやって自分が負ける必要がどこにあ

るだろう。ソ連の子どもたちが不審な顔をしたというのは、競走という前提がボヤケて、ただ社会連帯という観念だけが支配しているために、ものごとの具体的条件（ここでは駈けっこをしているということ）を見誤っていたためだと思えます。このことは軍備競走・生産競走において、アメリカを兎、ソ連を亀として考えてみれば、すぐに理解できます。いかに社会主義道徳の名家であるソ連だって眠っているアメリカをわざわざ揺り起こして、尋常に勝負をしようとはしないでしょう。

その話は別として、私はもし、道徳というものを、昔のままに、このような設定された問題を掲げ、それを善と悪との秤はかりにかけようとして、論理のやりくりに終始するものであるとするなら、そんなものには何の興味も関心も持つことができないということを言いたいのです。

私の関心は、亀がその具体的条件の下で、どれだけ真実な行動をとったか、どれだけ自己に忠実であったかということに限られます。善とか悪とか以前

のもっと自己の生命に密着した、もっとのっぴきならない問題としてだけ取り上げたいのです。

そういう観点からすると、先に掲げた子どもたちの答は、非常に不自然なものに感ぜられます。好きなのは後の亀だが、もし自分が亀だったら前のようにして勝負に勝つというのはまことに不可解なことです。私は、最近の十数年間は学校で昔のような偽善的道徳教育が行なわれていないのかかわらず、世の中全体の中に、あの観念的道徳主義みたいなものがまだまだ浸透していて、それが子どもたちの心しらすしらすに不知不識のうちに食い込んでいような気がするのです。それでなければ、あのような明瞭な矛盾した答は出てこないはずだと思います。起こしてやった亀が好きだという子どもたちは「善」という観念の化け物に占領されて、自己の本心を食い荒され、最も忌まわしい偽善者に作り上げられています。

道徳教育が各級学校で行なわれはじめている今日、また以前のような偽善者を作り、正直者をノイローゼに陥れる、あの人為的、屁理クツ道徳が横行して、

いっそう住み心地のわるい世の中にしはしないかと、
はなはだしく心を痛めずにはいられません。

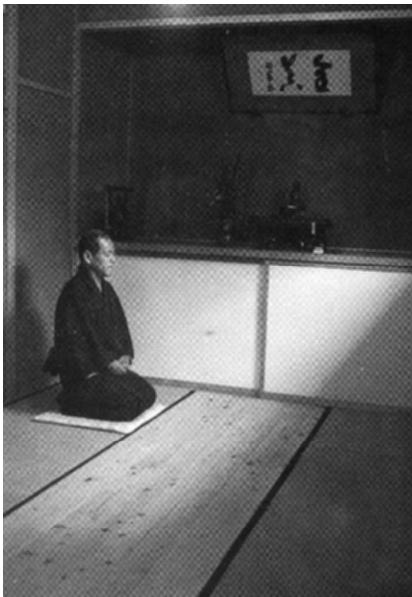
そして、こんどこそはもっと「人間」と「世の中」

の生きた事実を目を開き、真実を最も高く評価する
ような（道徳教育と名づけられる以前の）人生教育
が行なわれることを切望せざるを得ません。



ある日の一心寮

全真堂にひとり坐る



まみず

昭和四十九年 六七月合併号 その3

『まみず』百号・柏樹社十周年記念大講演集 2

2 講演 「山岡鉄舟」

大森曹玄老師



大森曹玄
(鉄舟会)

ただ今御紹介にあずかりました大森曹玄でございます。きょうは大森曹玄の十周年の記念大会でございますけれども、わたしも青年の頃、指導を受けました頭山満翁がこういうことを言われました。「偉大」ということは、量的に大きな仕事をするのではない、どんな小さなことでもコツコツと一生を貫いてやることだ、それを偉

大というのだ、と教えられました。わたくしは、中山さんには極めて最近お逢いしただけでございませけれども、「まみず」という雑誌がどのくらい社会的に知れ渡っているのか、知りませんでした。しかし、十年間孜孜として貫いて来られた、恐らく今後も、そこに並べられた十年間の雑誌の何倍もの量になるくらいお続けになるだろ

山岡鉄舟

——明治維新の

緒口をつくった人

うと思えます。そういう意味でこれこそほんとうの意味の偉大な仕事である、このように考えております。皆さん方のご協力ご支持もあると存じますが、こういう会に

初めて出させていただいて光栄に思っております。きょうは「山岡鉄舟」という人物について話せという中山さんのご指名でありますけれども、鉄舟という人について今ではあまり知られていないのではないかと思えますから、一応鉄舟さんの経歴をご紹介申し上げておきます。

山岡鉄舟の経歴

鉄舟という方は、天保七年（一八三六年）、小野朝右衛門高福と

いう六百石取りの旗本の四男として生まれました。お母さんは饑と申します。このお母さんが非常に偉い人でありませけれども、それは後に申し上げます。

九つの時に久須美閑適齋という人に剣道を習った、これが剣の道にはいった初めであります。十歳の時にお父さんについて飛驒の高山に参りました。そこに七年おり、十七歳の時にお父さんが亡くなられました。このお父さんの亡くなられたことにはいろいろの説があらまして、一般には脚気衝心ということで発表されておりますけれども、実際は切腹ではないかという説があります。当時はもし切腹というようになると、幕府の命令に背いて勝手に切腹した、

ということになると、家は断絶になりますので、病死ということにしたのではないか、という風な説がございます。

それから安政二年（一八五五年）一十歳の時に、柴村の長徳寺の願翁和尚、今の埼玉県川口の在ですが、そこで初めて参禅をされました。

その年、槍の師匠である山岡静山という人が亡くなりまして、その人の妹——英雄の英を書いて英と読みます——そのお婿さんになりました。これは山岡静山さんが生前常に、小野鉄太郎のような青年が俺の家を継いでくれるといいんだがな、と言っていたということとを、静山先生が亡くなってからのち聞きまして、「それほど先生が

自分を懇望されたのなら」というので、山岡家の跡を継いだわけです。ところがこの山岡静山という人は、ごく地位の低い人で、二十人、二十何人扶持とかという、極めて身分の低い侍で、鉄舟さんの方は六百石の旗本の子供ですから、本来ならば「提灯と釣鐘」というか、そういう家を継ぐべきではありません。せんけれども、お父さんが亡くなる時に、小判で三千五百両遺したそうです。その当時の三千五百両というのがどのくらいかわかりませんけれども、鉄舟さんはそれを全部、兄弟に領けまして、自分は百両持って山岡家に入り婿した、ということ、非常な身分違いの処に婿にはいったわけです。

二十一歳の時に講武所の世話係

になりました。その頃の逸話としては、講武所といえ、幕府の子弟を教育する、文武を練る学校でありますけれども、ここに初めて鉄舟さんが参りました日に、その剣道の稽古ぶりを見て、

「こんなものは剣道じゃない、こんなだらけたこととどうして剣道といえるか、剣道とはこういうものだ」

といって、自分が竹刀を持ちまして羽目をつき破った、その羽目はけやき檜の一寸あまりの厚さの板ですが、それを竹の竹刀で突き破って、剣道とはこういうものだといったという説が残っております。

二十三、四歳の時に、清川八郎と組みまして、尊攘党というものを作りました。尊皇攘夷の運動で

あります。恐らく鉄舟先生は、公武合体して攘夷をはかるといううなことを考えていたのではないかと思います。清川八郎という人は、策士として見られ、この人の人物の見方には異論がありますけれども、鉄舟さんほどの人が、芯からこの清川八郎という人を尊敬してたんです。非常に高く評価し、兄事していたわけです。ですから、それから逆に見て、清川八郎という人は、わたしは立派な人ではなかったかと思えます。「清川八郎」という彼の遺稿集が出版されておりますけれども、実に堂々たる、大名の家老のような風格であったといわれておりますから、単に策士とか、狡いとかといううな人ではなかったと思えます。有名

な益満休之助も尊攘党の同志で、鉄舟さんは益誚休之助とこの頃に知り合っているわけです。

この間、あの、浪花節調で歌を歌う、何と言いましたか、その人が、江戸開城のことを歌ってしましたけれど、そのことについて勝海舟との問題があります。海舟さんの方では、益誚休之助をつけて鉄舟を静岡にやったというわけですから、鉄舟さんはこの尊攘党の頃——十代から、益満休之助とは同じことをした仲間ですから、海舟さんの紹介を必要としない間柄であるわけで、これが後に問題になります。

明治元年、つまり慶応四年（一八六八年）、三十三歳の時に、西郷南洲と駿河で対決したという例の

一世一代のことがございます。わたくしの剣道の師匠、山田次朗吉先生には、「日本剣道史」という名著がありますけれども、その中で、南洲と鉄舟との駿河での立合い、これほど見事な試合はない、剣道上上恐らく最高の試合であろう、ほんとうの剣道というものはこういう風に使うものだ、ということを書いております。

西郷さんとの問題は、皆さんも、よく劇やいろいろのものでご存じでしょうけれども、鉄砲玉ひとつ撃ったわけではない、刃を交えたわけではありません。しかし、西郷南洲と堂々と対決して、見事に圍洲をして自分の要求を入れさせた、形のない刃を交えて、そして江戸八百八町の市民を、家を焼合

払われるという惨事から救った、宮本武蔵の言葉で言えば、これがほんとうの大的兵法、大きな剣道というべきだろうと思います。

これを海舟先生は、あれは俺がやった、という風に、宮内省に届けているわけですけれども、これもわたしは、海舟ほどの人が鉄舟の功績を横取りしたというようなさもない気持ちではないと思います。当時、勝海舟は幕府の軍事総裁ですから、鉄舟さんは徳川慶喜公から直接頼まれて駿府まで行きましたが、行く前に軍事総裁としての勝海舟に逢っているわけです。その時、海舟は鉄舟が駿河に行くことを反対しております。そんなことは空想だ、現実の政治の場面でそんな書生論が実行できるものじ

やない、といって反対しておりま
す。けれども鉄舟の勁かない気魄
におされて、ついに「ぞれじゃあ、
お前行って来い」——黙認と申し
ますか、勝手にやつてみるという
ことでやったわけです。

この間、三橋美智也さん、あの
人が、海舟はその時手紙を書いて
鉄舟に持たせてやった、益満を連
れさせたということを謳っていま
したけども、それが一般の説です
が、私は逆に西郷南洲翁の書簡集
を見ました。

それを見ますと、慶応四年の三
月ですか、その、山岡鉄舟に託し
た海舟の手紙というのが出ている
のです。それによると、その時書
いたものではありません。それか
ら一カ月前に、海舟が、越前侯

を通じて朝廷に呈出した嘆願書の
原稿か、写しであります。とくに
海舟が、鉄舟が行くので手紙を書
いたというものではありません。
それを「これを持っていけ」と言
われて、鉄舟が持って行ったので
すから、あの話し合いの時にもそ
れを事前にさし出しておりません。
南洲との話し合いができた後で、
「海舟さんから」と出したもので
しょう。しかし、海舟さんが、「あ
れはおれのやった仕事だ」といっ
たのは、江戸での正式調印は、徳
川方の軍事総裁として、海舟がや
ったのですから、これもウソでは
ありません。しかし、事実上は鉄
舟さんが既に解決をしていたとい
うことになります。

明治二年、三十四歳の時に、静

岡県の藩政補翼となりました。そ
の時に、清水次郎長と知り合った
わけです。明治元年の八月、榎本
武揚その他が軍艦八隻に乗って函
館に脱出しました。そのとき威臨
丸は暴風に遭って清水港に漂流し
ましたが、官軍に迎撃されて多く
の人が死にました。その死体は、
賊軍の死体だということで取り片付
ける者がなかった。それを、清水
次郎長が、罰せられることを覚悟
で、「死んだ仏様には敵も味方もな
い、朝廷の官軍のといふのは、生
きているうちのことだ」といって、
彼はこれを巴川の淵に葬りました。
それに感激した鉄舟さんが、明治
二年、静岡の藩政となって赴任し
た時に、初めて次郎長と知り合っ
た、ということがあります。

その後、明治四年、三十六歳の時に茨城県の参事、あるいは九州の伊万里県の権令、こういう役目をしております。

なお、今の静岡の時代であります、例の静岡の牧之原を開墾して、あそこには大きな茶園を造った、これは鉄舟さんの仕事であります。幕府の禄を離れた侍たちをあそこに入れて土地を開墾して静岡の名産のお茶をつくらせた、こういうこともやっております。

明治五年、三十七歳の時に侍従になりました。これは、西郷南洲が「宮中の改革をしなければいけない。宮中には昔から女官というもの幅をきかして、宮中の内部を乱すので、これを肅正しなければいけない。それには、鉄舟

のような硬骨な人がやればそれができる」ということで推薦したといわれます。

明治十三年三月三十日に、大悟した。

明治二十一年七月十九日の朝、五十三歳で亡くなりました。この月の十七日になりますと、奥さんを呼んで、体を浄めて白い着物に着替え、宮城の方に向かって坐りました。そして十八日になりますと、剣道をやっております。最後に五点の型というのを真剣でやってみせて、「普段とちっとも変わらんなあ」と言って笑ったという話が伝えられております。で、午後

写経をやりましたが、非常に暑い時で、さすがの鉄舟さんも、もう死の直前ですから、タラタラと油

汗を流し書いている紙に落ちた。

で、千葉立蔵というお弟子であって侍医である人が、「先生、一枚も二枚も同じことでしょうか。それでおやめになったらどうですか」と言いますと、「そうですねあ」と言ってやめた。これが最後で、翌十九日の早朝亡くなっております。五十三歳でした。そして従三位勲二等子爵というものを頂いたわけでありました。大体そんなことが、鉄舟翁の経歴であります。

形の上では剣道、心の上では禪

鉄舟さんは、十三の時に、お父さんから、

「お前が立派な侍になるためには、形の上では剣道をやり、心の上で、

形のないものとしては禅を学べ」
こういうふうに言われた。そこで
剣道と禅とを始められた、これは
自分でそういうふうを書いており
ますから、恐らく間違いはないで
しょう。禅はさっき申しました川口
の長徳寺の願翁、竜沢寺の星定、
相国寺の独園、円覚寺の洪川とい
ったような人々に教えを受けたわ
けですけれども、最後に天龍寺の
滴水禪師に仕上げられて禅を完成
したわけです。

「この人は、若い頃から『鬼鉄』
と言われまして、どこへ行っても
そこで稽古をしている限り、面を
一遍も脱がなかった。面をかぶっ
たままで朝から晩までも続けて
立ち合った。人々は鬼鉄だからし
ようがないと言って、それを黙認

していたといわれます。なにしろ
身の丈が六尺二寸あって、目方が
二十九貫ですか、相撲のような大
きな体をしていた人ですから、体
力もありましようから、随分強い
剣道をやったわけです。

ところが二十八歳の時に、福井
県の小浜の藩士で浅利又七郎とい
う人が非常な名剣士だという噂を
聞いて、その人のところに試合に
行きました。これはその時に十三、
四歳の少年が浅利道場におりまし
て、その人が記録をとって残して
います。それを見ますと、朝のう
ちにやって来たらしい。

「先生、一手お教えを願います」
というので二人で支度をして始め
た。小半日勝負がつかないで試合
をしていた、そのうちに鉄舟さん

が業を煮やしたのか、大きな体、
重い目方に物を言わせて、浅利の
首に竹刀をかけ、足がらをかけて
捻じ倒したということです。

さて、そこで試合が終ったわけ
ですが、道具を外しながら、浅利
先生が、

「山岡さん、今の勝負はどうです
か？」

と、鉄舟さんが

「勿論わたしの勝です」というと
浅利が、

「山岡さん、あなたの胴を御覧な
さい。私は倒される瞬間に胴を入
れた。それは確かにはいつている。
胴を見てご覧なさい」

鉄舟さんが胴をひっくり返して
みると――昔は竹胴だったでしょ
うから、その右胴の竹が三本折れ

ていた。鉄舟さんはしまったと思
ったでしょう。思ったでしょうけ
れども、

「これはあなたが打ったので折れ
たではありませんよ。私は貧乏
で道具は古い虫食いを使っている
ので、折れただけです」
と、強情を張ったらしい。

で、まあ、浅利さんは、
「そつですか」

と言って、これに対して抗弁はし
なかった。

鉄舟さんは、その帰り道、義兄
の高橋泥舟——高橋泥舟という人
は山岡静山の兄さんです。その高
橋泥舟のところに寄ってその話を
しました。すると泥舟が、

「鉄つあん、そいつは本物だぜ」
といったという。そつという言葉で

書いていますね。

「そいつは本物だぜ」というと鉄
舟さんが、

「おれもそつ思つ」

と言って、翌日ちゃんと紋付を着
用し、束脩を持って改めて弟子入
りをしたいと言って入門をした。

「そんじゃあ稽古します」

というので、今度は浅利又七郎は
木剣を持って、素面素手で稽古を
したといわれます。

これは、今、金沢で保健所長を
している村上康正という医学博士
がおります。この人は鉄舟さんの
無刀流をやる人ですが、わたしは
その村上さんに、

「木剣で試合をする時にはどうし
たんだらうか」

と聞きましたら、浅利さんは下段

に構えて気合で押していったのだ
といわれました。さすがの鉄舟さ
ん、じりじり押されてしまつて後

へさがる、で、道場の羽目にこつ
（曹玄師自ら身振りて説明された）
押しつけられてしまつた、すると、
浅利先生は木剣を下して道場の真
中に戻りまた構える。下段に構え
てジイッとやる、鉄舟さん押され
てまたさがる。何べんかそついう
ことをやっているうちに、最後に
鉄舟さんが入口の戸の所に押しつ
けられた。すると浅利先生片手で
戸をあけて、ファンとしめられた、
「あしたお出で」としめ出されて
しまつた。てんで歯が立たなかつ
た。

これが鉄舟さんにはよほどこた
えた、毎日それをやられて、今日

は、と思うけれども、いつでも気合に押されてしまう。まるで大人に子どもがひねられるようにやられてしまう。それからはいつでも竹刀を構えると浅利又七郎の顔が目の前に現われて、のしかかるように圧迫してくる。坐禪をすると、浅利の幻影が現われて、上から大きな石で圧しつぶすように迫ってくる。

このために、かねて参禪していた天龍の滴水さんの所に参りました、

「滴水老師、実は自分はこういうことで困っているんだけども……」

と訴えた。滴水さんは、

「それは幽霊というものだ」

と言ったので、五位の兼中至の頷を

みるように、といわれたのです。これは専門的なことですから、お解りいただかなくても結構ですが、ことはだけ申し上げておきます。

五位の四番目に兼中至というのがあるんです。それに「両及、鋒を交えて避くるを須もちひず。好手還おのずつて火裏の蓮に同じ。宛然として自ら衝天の気あり」というので

す。甲と乙とが及を交える、そして抜き差しならない、退けばやられる、出ようとすれば相手に抑えられて出られない、といったどうにも抜きさし出来ない、しかし、好手というのは「好む」という字に、手と書きますが、名人のことです、名人というものは、そういう場合でも、火の中の蓮のように——これはお釈迦さんの説にあるのです

ね、蓮というものは火の中にはいつても萎れない、火の中でスーウーッと突っ立っている、そのように火焰の中の蓮、火の中の蓮のようなもので、「宛然として自ら衝天の気あり」、天を衝くような気魄がある、そういうことを歌われているわけです。それは、禪の専門語で申しますと、「明暗双双底」といって、七転八倒してもがいている中で、身にじり動きもしない、という境地だといえますけれども、それを公案として与えられた。それに鉄舟さん三年かかりました。

それからというものは、いつでも腰に煙管を二本差していて、一服する時にはもう一本出して「両及鋒を交えて」と、交叉して工夫する、それから飯を食う時には飯

を食うのを忘れて、箸を両手にもって「両刃鋒を交えて……」。道場で稽古をする時も、「両刃鋒を交えて……」と、こつやる。しまいに奥さんが心配しまして滴水禪師をお訪ねして、

「主人が気が狂ったようです。あのままだと、ほんとの気狂いになります、どうぞあれを止めさせていただきたい」

と言つと、

「ま、放つときなさい、大丈夫です。放つときなさい」

と言われたという話もあります。

ある日、平沼専蔵という富豪が鉄舟さんの家を訪ねてきて、自分の、今日の財をなした理由、過去の経験を物語って聞かせました。その物語というのは、

「自分は若い頃、五百円という金を得た。で、これを元手に、ある品物を買った、そしたらそれを聞いた友人が、お前、何々という品物を持っているそうだが、俺にくらいくらで譲らないか。五百円で買ったものは五百五円か、五百十円か。ところが譲らない。ハハアこれは値が上がって来たな、いや、そんなことじゃ売れない。また違ふ友人が来て、それに十円か二十円載せて、それを俺に譲らないか。いや、駄目だ、というようなことで、次々にこつ値が上がって来る。しかし欲ばって、もうチヨット我慢してれば、もっと高く売れるだろうと思っていたら、ガターンと相場が落ちて、五百円丸損した。がしかし、それが授業料

になって商売のコツというものをおぼえた。それ以来、頭のさわやかな時に、一定の見通しを立てる、見通しを立てたら、あとはどういふ状況の変化があるうと、そんなことは構わず、自分の立てた見通しのとおりをやった。そのために勿論損をしたこともあるけれども、遂にそれが原因で本当の商売人になれて、今日の財をなした」

こつという話をするのを、鉄舟さん聞いておまして、自分の「両刃鋒を交えて避くるを須いず」というのと似てるもんですから、「よし来たッ」というわけで、その日から道場では相手が打とうが突こうが構わず、イヤァッと衝天の意気で押して行く。坐禪をして、こつやうって浅利の幻影が出て来ても、

「両及鋒を交えず……」で押していく。ちようど五日間、昼も夜もそういう気魄で修行したのです。

それが明治十三年の三月の末、二十九日の晩に、ほんの五分くらい坐ったと思ったらもう夜が明けていた。気分もいつもとはまるきり違っていった。そこで、竹刀をもつて構えてみたら、もう幻影は現われない。「さては俺は達したか」と喜びの心を押えて、弟子の籠手田安定という、これはのち滋賀県の知事をした人ですが、それを呼んで試合を命じた。すると、籠手田安定が、

「いや、今日の先生はいつもと違う、恐ろしくて前に立っていられません」

と言って、すぐ面を取って、

「どうぞ、お相手は劔弁して下さい」という。で、浅利先生を迎えにやうつて、浅利先生と木劔で試合をやった。構えただけで浅利先生が木劔を投げた。

「あなたは達した。私の及ぶところではない」

と言われて、一刀流の伝書を全部鉄舟さんに譲ったわけです。この時、劔の極意に到達すると同時に初めて禅の悟りに目を開いた、とこう自分で書いております。

同時に、字を書いてみたら、書が一変していたと申します。鉄舟さんは入木道じゅぼくどうという弘法大師が支那から伝えた書法の第六十二世です。高山の岩佐一亭と言う人が六十一世。その人から皆伝を受けました。ですから、鉄舟さんは入木道

の宗家であります。その書が悟った翌日、がらっと筆意が変わった。これほど見事な転換ぶりは、昔の禅僧の物語にはありますけれど、近世にはないと思います。しかも、具体的に、劔道をやってみても変わってきた。書道もまるで筆意が変わっていた。具体的にこのように変わった悟り方というものは、わたしは昔のことは知りませんが、現実の人としては、ないと思いません。まあ、大体こういうふうにして鉄舟さんは解脱したわけです。しかし、それでもなお鉄舟さんはですね、自分で書いたことばによりますと、なお男女相對の念が残ったとあります。

男女相對の念というのは、女性を見ると欲望が起こるということ

ではなくて、物がふたつに見える、自分と他人とが対立するという、そういう見方——二元相対的に見るという慣習的なものが残っているというのだと思います。死に對すると生を想う、というふうなことだと思えます。それからまた一生懸命やりまして、四十九歳の時、庭の草花の咲くのを見た途端ふっと根こそぎ生死の根が切れた。それ以来鉄舟さんは、生死の上で自由を得た、と書いておられます。これは四十九歳の時です。だから、鉄舟さんは、若い頃から剣をやり、禅をやり、書をやりましたが、全く解脱の境地にはいったのは四十九歳の時です。

ところで、時間がもうあまりありませんので、急いで申し上げま

す。鉄舟さんの禅、鉄舟さんの剣は先程申しました通り二十歳で講武所の先生になった時に、「この剣道はなっていない」と羽目を竹刀で突き破ったという烈しいものでした。しかし、晩年は、鉄舟さんの剣道は、これは私の師匠の山田次朗吉が見て言っておりますが、きわめてのそのそしていたといえます。私の師匠は、鉄舟さんがそのそやるものだから、晩年の弟子たちは皆、剣道とはそのそやるものだ、と誤解していたから名人がでなかったと悪口を言っておりますすけれど、そういうことはいと思います。

鎌倉に、高野弘正という範士がおりますけれども、この人のお父さんを高野佐三郎と言います。こ

の高野佐三郎先生は近來の名人ですが、この人がよく話されたそうです。自分は鉄舟先生に稽古を願った時に、打てばいくらでも打てた、しかし打たれても知らん顔していて、打ったという気がしない、しかも、太い竹刀でたまたまほしいと竹刀を突き出す。それも手前で止めて突かない。それで人は、鉄舟も老いたり、モウロクした、体力がなくなつてダメになつた、などと考えたというんです。ところが、ほいっと突くまねして止めた竹刀がですね、面をとって防具をはずすと、なんかここから（咽喉のところを指す）うしろに風穴が開いたようにすうすうする、家に帰って風呂にはいるとなんかこすばつと穴があいちゃつてるよ

うな気がする。翌日もそういう気がするということなんです。恐ろしいもんだ、ということをお話されたということですよ。

また禅もですね、初めはあの人はひどく貧乏をしております。家中に畳が三枚しかなかった。で、自分がいつも坐っている畳には、真中に穴があいていた。坐るところが決まっていますから。で、そこで坐禅をはじめると、右往左往していたネズミがびたーっと静まると、それを奥さんがある日気づいて、あなたが坐禅を始めると、ネズミがちつとも騒がなくなります、といったら、

「そうか、おれの坐禅はネズミの案山子程度のものかな」
と言って笑ったといいますが、恐

らくものすごい迫力で坐っていたと思います。これはなかなかできません。私も若い頃天井裏でネズミが騒いでいるので、木剣を構えてウーンと放射能を出すつもりでやってみただけでもちつとも静かにならない(笑)それで、ネズミが居ると思うところを目がけて木剣を振ると、ビュツと音がしますから静まります。構えただけでは、なかなかネズミがいなくならない。鉄舟さんはそれ程烈しい禅をやった。

畏れなきを施す

ところがどうでしょう。晩年、この人は夜の二時、三時まで写経をしていたのですが、ネズミが出

てきますとね、手にとまったり肩にとまったり、坐禅しながらやっているそのひざの上にとまったり、ネズミが鉄舟さんと一緒に遊んでいた、とそういうふうになるつきり変わったわけですよ。

そして、ある弟子が、
「先生、剣道の極意を教えてください」と言いたい

「それは浅草の観音様にお預けしてあるから観音様へ行つて教えてもらいなさい」

と言うので、その人が観音様へ行つて、どれが極意かなとこう見て廻ると、浅草の観音様でも上野の観音様でも正面に「施無畏」という額があります。「無畏を施す」、「畏れなきを施す」という字です。こ

これは観音経の文句です。「観音菩薩は無畏を施し給うこの故に世間では観音菩薩を『施無畏者』と言ふ」という句が観音経の世尊偈にはいるちよつと前にあります。その「無畏を施す」という文句、「畏れなきを施す」、つまり相手の持っている不安を全部ぬぐい去ってしまう、絶対の安心を与える、という意味のことばです。それを見てその人が、

「先生、観音様に教えて頂いてきました」

「ああそうですか。それはよかったですなあ」

と言っていたという。

これを裏返してみる物語に、小倉鉄樹という鉄舟さん饅晩年の弟子がおります。この人は十幾つで

鉄舟さんの門人になった人で、有名な女流画家の小倉遊亀さんの旦那さんです。この人の「おれの師匠」という物語があります。その中に「こういうことが書いてあります。

自分が書生をしていたころ、お客さんが朝訪ねてくる。このお客さん、なかなか帰らない。しかたがないから昼飯をつくって出す。と、昼飯食べたら帰るかと思うとまだ帰らない、夕方までいる。やむを得ないからまた夕飯を出す。長い人は夜中までいる、私たち書生は非常に困った。しかし考えてみるとですね、この人はよほど切羽詰った苦しいことがあって、おやじさんを訪ねてきたのだろう。それがおやじさんの側にると、大船に果ったような安心感を与えら

れる、ここを去りたくない。おやじの側に居れば大丈夫という安心感があるから帰らないんだ。そういう人を追い出すわけにはいかない、と言っております。

その人は別にそれが鉄舟さんの施無畏者としての境涯であるとは書いておりませんけれども、私共が判断しますとですね、そういう境地なんです。その人に接するだけでこちらの不安、動揺、恐れ、悩みなどがスーッと消えてしまふ、鉄舟とう人は、そういう力を持っていた。観音様のよな力を持っていた。こう思います。

これは書の方から見ましても、西郷南洲は「承知のように猛烈な迫力です。西郷南洲の「敬天愛人」という大書を見ますと、線の中か

らモクモクモクモクと雲が湧き出るような迫力があります。けれど、鉄舟さんの晩年の書を見ますと、ひき込まれるような暖かさ、非常な情味があります。だから、そういう意味では、迫力においては鉄舟さんも南洲に劣ったでしょうけれども、晩年における鉄舟さんの暖かみ、慈愛という点においては南洲を超えたのではないか、と思うほどの境地に行っています。

「立切」——自我を殺す

そういうふうには烈しいところからですね、鍛えに鍛えてやわらかくなった、まあ、鉄舟さんの剣道に「立切たちきり」ということがあります。これは入門して三年くらいた

ちますと、今のし、ぎ、でなくて、自分から誓願をするのです。

「私は立切を一日やりとう、ご、さい、ます」と願ひ出るとその人の名前が道場にはり出される。その人は六時頃から二百面、つまり、二百人を相手に稽しなければならぬ。でも若い人は一日に二百面ぐらいたばやるきになりさえすればやれるでしょう、それをやり遂げた者は一級あがるわけです。そしてまた、二、三年経つと、今度は「立切三日」ということを誓願するわけです。これは三日間、これも、腕力の強い、体力の旺盛な人ならば、どうにか出来るでしょう。最後は「立切七日」、千四百面、これは香川善次郎という無刀流の二世を継いだ人が記録を残しております。

それを見ますと、香川善次郎さんも最初は三日で参った。四日目の朝、道場へ行こうと思うと、雨が降っているのに傘が持てない。仕方がなく、奥さんが毛布を頭から被せた。傘さえ持つ力がないのです。道場に行くと、もう鉄舟先生がそこにすわっておられる。

「香川さん、どうですか？」

「やります」

「どうですか、おやめになったらどうですか」

鉄舟さんはどうも言葉は丁寧だったようです。江戸っ子のべらんめえ口調をやるかと思うと、他人に対しては非常に丁寧だった。

「やめたらどうですか？」

香川さんそう書いています。

「いや、やります」

「おやめなさい。それでいい。やめなさい」

といて、四日目の朝にやめていきます。それから何年か経って、香川さんが一週間の立切をやっておりません。

この立切というのはですね、石川竜三という、鉄舟さんの三世。

ついでにちょっと申しますと、山岡鉄舟さんの無刀流というのは、山岡鉄舟さんが創始者、二世が香川善次郎、三世が石川竜三、四世が連合艦隊の参謀長の草鹿竜之介、五世が、いま辞めました、元最高裁の長官であった石田和外、今度、全日本剣道連盟の会長になりましたあの人が、鉄舟さんの五世であります。

さて、鉄舟門下の立切というの

はですね、石川竜三さんが書いたのによると、こういうことです。

「これは自我を殺す道だ、決定的に自我を克服するのだ。脇に先輩が鉄扇を持っていて床を叩く。もうヘトヘトになってくると、ますます勢いよくこう叩いて（以下、実演つき）、『カカレツ』『カカレツ』こうやる、ちょっとでもゆるめると、『カカレツ』と叩くと、徹底的にかからせる、これには誰れでも参ります」

この間、亡くなりました持田範士という人、あの人が八十三歳の時ですが、私の知合いの若い七段の教士がですね、その晩帰りにわたしの所に寄って話しました。

「きょう、持田先生に稽古を願いました。ところが僕は三分で息が

切れてしまった」

と。血気旺んな、しかも剣道の専門家が、八十三歳の老人に合って三分で息が切れた。せめて袴でも触ってみたいと思っただけれど、どこも触らずに三分でも『参りました』と。そのくらい辛いもので、それをですね、一日二百面、さらにそれを一週間、徹底的にやる。これでは、いかなる強情でも自我が殺されざるを得ない。

わたしも若いころ、直心影流の山田先生から煽てられて、直心影流には百本稽古ということがある、これを一週間やった者は免許だ。あなたなら出来るでしょう、などとおだてられて本気になってやりました。これは長期計画ですね、四十日ばかりの計画で、だんだん

だんだん本数をふやしていった。そして、さて今日から百本、と取りかかりましたが、三日目の晩には腕が上がらないのです。そして、声が嘎れてしまって「ウェーッ」という声しか出ない、疲れているから熟睡出来ると思ったら、寢床にはいると体が火照って眠れない、物は食べられない、水と卵を流し込むだけ。ほんとうにもう、死ぬという、肉体の限界までゆきます。しかし、若い時ですから、まさかです、ね、「先生、出来ませんでした」といって、頭を下げて先生のところにいくわけにゆかないでしょう。というのでどうやら押し切ってやると、四日目くらいになるとスウィットと楽になる。今度はです、ね、竹刀が体力を使わないでスウィット

と自然に上がるんです。そして、まあ（ここで動作で示される）竹刀が真直ぐ中心にサーッと無理なく動く、という風になる。わたしは、鉄舟さんの禅でも剣道でも、鉄舟さんの教育法というのは、そこにあったと思うんです。

自力の限界を尽す

——無我の原理

まずわたしどもはその意味で、剣道でも坐禅でも、初めは不動仁王の位で、充実した気魄でやり抜いてゆく、やってやるとことんやり抜いてゆけば、道元禪師の言葉で言えば「身をも心をも放ち忘れて仏の中に投げ入れる」で、完全に仏の中に自己が死に切っし

まうと、逆に仏の御生命おんいのちとして生まれ変わってくる、そういう風に、その転換は、自力の限界を尽くさないと思いません。そういう風なやり方を鉄舟さんはやっておりました。

最後に時間もありませんので、ひとつだけ申し上げておきたいのは、鉄舟さんが晩年に武士道の講話を弟子に対してしております。教育勅語の中に、不思議に鉄舟さんが使ったことばがそのまま這入っています。というのは、井上毅という人が、鉄舟さんのところで武士道の講話を聞いております。例えば、「之レ我が国体ノ精華ニシテ」という言葉は、鉄舟さんが「之レ武士道ノ精華ニシテ」といっているのに似ていますし、また「億

兆心イッヲ一ニシテ世々ソノ美ヲ濟ナセ
ルハ」なども鉄舟さんの武士道論
に出ております。それは、教育勅
語の出る前に、鉄舟さんの本が出
版されていますから、鉄舟さんの
ほうが、源もとをなしているのではな
いかと想像されます。

この鉄舟さんの武士道論という
ものは、鉄舟さんの亡くなる前の
講述ですから、四十九歳で完成し
てそれから二年経っておるところ
の鉄舟さんの話ですから、鉄舟さ
んの思想として完成の域のものだ
と思います。その中にですね、こ
ういうことを言っています。「武士
道というのは、昔の学者が、こ
ういうことをする、ああいうことを
すると、徳目を挙げて、それ
も結構だ、自分はそれを否定する

ものではない。しかし自分はそ
うしない。自分は無我の原理でやる
のだ。そして武士道というのは、
侍の行う道義ではない、日本人全
部の行う道義だ。いや世界人類必
ず行なわなければならない道だ」、
こういうことを言っているのです。

「無我の道」とはどういうのをい
うかという、何もないんだ、何
もなく親に対すれば、しぜーん
に孝になる、友達に対すればおのずか自
ら信になる、そういうものである。
信とはこれこれのことだと、レ
ールを敷いておいてその上をコツコ
ツと歩いてゆくのではない、無我
になってやってゆけば自らそれが
出てくるんだ。こういうことを簡
単な言葉で書いておりますけれど
も、わたしはこれは道元禪師の現

成公案の巻にある文句と同じだと
思います。道というものは、われ
われの外にレールがあつて、その
上を踏んで行くのではなくて、卒
然として無我の状態で、無心の状
態で、空っぽの状態で行えば、自
らその踏んだ足跡が道になるのだ。
これはわたしは、鉄舟さんはさす
がに磨きあげた人だから言えるの
であつて、こういう風な武士道論
をやった人は嘗てないと思います。
小学生じゃあるまいし、孝行とは
こういうことをすることだ、忠義
とはこういうことをすることだ、
とレールを作つてその上をコツコ
ツ歩いてゆくのでは、それは幼稚
園の道徳であつて、大人の道では
ないですね。

婦人の徳

そこで、もう一つ申し上げたいのは、鉄舟さん程の人が、武士道論の中で「婦人の徳」をニヶ条書いているのです。婦人の徳を…。

鉄舟さんが武士道論の中で婦人のことを話す時に、お母さんを思い浮かべていたと、わたしは思うのです。それはこういうことがあるからです。

鉄舟さんが七つか八つの時に、お母さんについて手習いをした。ちようど忠孝という字を書いています。鉄舟さんは「母上、これはどういう意味ですか」と。

「鉄よ、わたしはいくら無学でも

お前さんに忠孝とはこういうことだと聞かせてあげることは出来ると思う。しかし聞かせても無駄だ、これは体で行なうことだ、あなたは、大きくなったら忠孝の行なえるような人になって下さい」と

と言ったんですね。すると鉄舟さんがお母さんのひざに手を置いてお母さんの顔を見上げながら、「母上はその忠孝の道を行なっておられますか」

と言った。ここがお母さんの偉いところですね。お母さん、黙っていたけれどハラハラと涙を流した。「私は一生懸命心がけておりますけれど行なえません」

こういって泣いたと言っていますね。そのお母さんの涙が、これは鉄舟さん、自分で書いておられます

が、自分の顔に当たった時に脊髄を震撼するような感激をおぼえた。七つ八つの子どもがです。わたしは鉄舟さんの少年時代の基本はです、このお母さんの涙で築かれたと信じます。

「私は行なえません。一生懸命心がけているけれども行なえません。あなたはどうぞそれが行なえるような人になって下さい」と

といった涙がですね、鉄舟さんの背骨をゆるがし、ついに鉄舟さんの一生を動かした。恐らく鉄舟さんが武士道の中で男の道、侍の道を説く中に婦人という箇条をニヶ条述べている時には、その亡きお母さんを感じて思い浮かべていたのではないかと、こう思います。

まあ話が中途半端になりましたけれど、時間になりましたので、これで終わらせていただきます。まことに舌足らずで申し訳ございませんけれどもお許しを願いたいと思います。御静聴ありがとうございます。 (拍手)

まみず

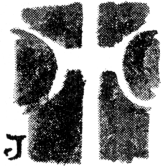
昭和四十九年
九月号

怒り

白杖 43

ケチな根性ほど自分を小さくし、卑しくするソクなものはない。物や労力や愛情の出し惜しみは、むろんケチな根性のあらわれだけけれど、一番ケチな浅ましいことは、自分の弱点を突かれて怒る怒りである。

これを解決するのが人間にとって一番大事なことであると同時に、一番困難な課題である。



ジ

「国に理相を」……ネホサの提案

——仲間意識の拡大——

和田 重正

(小田原はじめ塾)

昨今東西の冷戦が緩和され、世界戦争の危険は遠退いたようにみえます。たしかに、十年ほど前、キューバにおけるソ連のミサイル基地に関して起こった米ソ間の一触即発的危機の頃と比べると、今日は緊迫感が減っています。しかし人類絶滅戦争の危険がなくなつたというわけではありません。

核拡散防止条約の締結が多国間に求められたり、核兵器に関する

軍備制限の話合いが米ソ間で行われたりして、核兵器の無制限の増強を抑制しようという努力がなされていきます。その面を見ると、如何にも核戦争回避の努力が本気でなされているように感ぜられますが、他の面から見ると、あの努力は決して戦争回避のための真面目な努力ではないということが歴然とします。これらのことについて詳しく述べることはできませんが、核戦争の危険は、キューバ事件の当時と今日とではその様相が変わつてきたというだけで、実は、その危険度は、決して減っているのではないということはおかねばなりません。

核兵器の爆発、しかも、その全力を挙げての乱戦がこの瞬間にも

起こり得るといふ状態は、少しも変わってはいません。

核保有国の首脳部や、日本のように他国の核の傘に保護されていると思つている国の首脳部達は、核保有の意義をその戦争抑止力に求めています。つまり、核兵器は「使わないために」完備してあるのだと主張しています。この抑止力理論が、核兵器保有を正当化する唯一の根拠であります。そして、これは如何にも説得力のある正論のように見えます。しかし、核兵器に関する限り、どんなに正しい理論でも、それはただ一箇の事実によつて軽く吹飛んでしまいます。この抑止力理論の正しさというものは、抑止力の利いている間は正しいのであって、もしその誤りが

実証されたときは、もはや正否の論は人類と共に消えてしまおうという性質のものです。ですから自国の存立と安全を核兵器の威力に頼っている人々の信じて唱えるその抑止力論の正否をわれわれが論ずることは、無意味であると言わねばなりません。ただ、われわれは、抑止力論は戦争が抑止されている間だけ正しいのだということをはっきり知っておかなければならぬと思います。それからもう一つ、保有国の人々は「核兵器は使わないために持っているのだ」と言いますが、その言は信じてよいと思いません。彼等は必死にそう思おうと思っているのでしょうか。ところが、核兵器は使えないのではありません。今のところ使わないだけ

であって、使えない兵器ではないのです。彼等は、どれだけうまく使えるかを、あらゆる犠牲と全人類の非難にも屈せず、実験を続けています。そして、より精度の高い、より威力のある兵器を開発し、それをどの瞬間にでも使えるように配備して、日夜待機させてあります。このボタン一つがあらゆる抑止力の正論を吹き飛ばしてしまふのです。これはよその国の話ではなく、この日本とそこに住む私とあなたの運命の可能性について語っているのです。

さてこのような怪物・核兵器(生物兵器・化学兵器など、核に劣らぬ絶滅兵器もあります)が、それらのものの代表として核兵器だけを挙げます)とは一体人類にとって

何なのだろう、どういう意味のものなのだろう。

理屈は抜きにして結論だけを言ってみれば、それは人類の悪智の塊り、精選された科学知識の結晶であります。この塊りや結晶は、今もなお、日に日に強化成長しています。

では、この気味のわるい塊りや結晶は、どんな力によって作られたのでしょうか。人間の知恵や科学知識は、それ自体としては善でもなく悪でもありません。それを善に働かせ悪に動員するのには、何かの力が作用しなければなりません。この場合、いったいどんな力が作用したのでしょうか。

それは恐怖心です。自己の生命財産その他の安全が脅かされると

いう恐怖心です。恐怖心が動機になって人々は集団を作り外部に対する防衛力を強化しようとする苦心したのでしよう。その恐怖心は何から起こるかと言えば、不信から起こる。

個人間でも、家族間でもその他の集団の間でも不信が支配すれば、攻撃されはしないかとの恐怖心が生ずる。それが高すると、先制攻撃を敢行しようという決断にまで到るでしょう。しかし、人類が交通の発達・物資の豊富さの増進などいろいろな原因により、互いに殺し合わねばならないほどの恐怖感を抱く範囲が、段々に限定されてきました。そして、何千年もかかって最後に殺し合いの集団として残ったのが国家という集団であ

ります。国家という集団は、今なおある場合には、人々に殺りくをさせ命じ、その行為を正当化する力を持っています。

核兵器という言葉道断の殺りく兵器を造らせ、それをどの瞬間にも実動させ得る状態に保たせているのは、この国家の恐怖心であり、その恐怖心は国家間の不信から出ていることは明かであります。

ですから、この人智の誤用・科学文明の誤まれる方向への発達の象徴である核兵器を解体して、人類が安心して生活し得るようになるためには、国家間の不信による恐怖感を無くさなければなりません。と言うより、人類生き延びのための文明の進路の転換の度合を計る目安として核兵器の盛衰を見

るならば、核兵器廃棄を目指す活動は、文明全体の性格の転換に通じると考えられるわけです。

ともかく、核兵器の廃棄は単なる核兵器の廃棄であるだけでなく、それは、文明の進路の転換を意味する。核兵器の廃棄への努力はそういう意味を持つものであります。

繰り返して言えば、国家という集団の恐怖心から出た核兵器は、その恐怖心を除かねば仕末がつかないし、恐怖心は、不信を清算しなければ取除くことはできない。——というわけで問題は国家間の不信感の除去ということに焦点が絞られてきます。

では、どうして不信感を無くることができようか。最も簡単な答は、恐怖の主体、不信の客体

である国家なるものの廃止解体ですが、それを強行実現しようとしても、現実には不可能に近いと思われる。それは、かなり遠い将来のための青写真として描かれる人類社会の姿だと思われれます。

そのような短兵急な道でなく、そこに到る一つの段階として考えられるのが、歴史的國家の主権を認容しつつ、その普遍的に具えているエゴイステイックな性格を転じて國際間の共栄に貢献すること、を根本國是とする國家に変貌させることであります。—— そうなれば、國家はもはや本来の意味の國家ではなくなっているのかも知れませんが。

それはむろん容易なことではありませんが、その方向への変遷を

実現するための具体的方法として提唱されたのが、「國に理想を掲げよう」という、いわゆるネホサの提案なのであります。

日本が、核兵器によつて象徴される人類文明の行き詰まりを打開するのに、どのような貢献をなし得るか、最も効果的な道は何であるか、に對する一つの答を提出したのであります。

その提案の最重要な部分の一つはむろん、飢餓と疾病と無知に苦しむ開發途上國の人々に對する援助協力を日本の根本國是としよう、という点にあります。そのような國是の実現を目的とする運動を起こそうという提案であります。

その提案の詳しいことは、拙著『國家エゴイズムを超えて』（柏樹

社刊）を読んでいただくかねばなりません。ここで附け加えておきたいことが一つあります。この運動が平和運動の中でどのような位置を占めるかということですが。

一口に平和運動と言っても、その目のつけどころにはいろいろあります。

戰爭に近づく恐れのある個々の具體的事柄に對して、直接的對抗措置をとろうとする活動—— 声明を發するとかデモや抗議集會あるいは實力行使によつて阻止するなど。そういう種類の平和運動もありますし、また、もっと總括的な戰爭肯定の政治姿勢に對抗して行われる平和運動もあります。これは現在の政治レベルでの平和運動だと言えます。

次に人間の欲求のあり方を深く見究め、且つ人類の歴史の見通しの上に立ち、安定した平和実現の道を提唱する、これも平和運動の一種だと言えます。

大きく分ければ、右の三種類があるわけですが、それらの運動は、決して互いに相容れないものではありません。各級の運動が併存しているからこそ、歴史の方向を平和に向けることができるのです。同一目的に向かいながら、目のつけどころが違い、重点の置きどころが異なっているというだけです。だから、一人の人が同時に二つまたは三つの運動に参加しても、決しておかしいことはありません。ただ、人々の境遇や性格などの相異により、その三種の中の異なっ

たいずれかの一つに主力を注ぐことになるというだけです。

しかし、実際にはそのことを理解せず、区々たる理屈にとらわれて自分の参加している運動だけが特に正しく他は価値がないと思っている人が沢山ありますが、それは大いなる偏見であると言わねばなりませんし、そのような偏見は平和達成の妨げにさえなります。

さて、われわれの運動(ネホサ)はいずれの種類に属するかと言えば無論第三類であります。したがって、この運動そのものは、第一類や第二類のような行動はとりませんが、われわれの運動に参加するメンバーが同時に他の平和運動に参加することは何等の矛盾はないわけです。

そこで、われわれの運動の究極的に目指すところは人々の意識の変革による安定的平和の実現であります。その意識の変革とは、要するに、仲間意識の飛躍的拡大のことです。遠大至極の構想ですが、それへ向かっての有効な具体的方法を提唱しているのです。

ここに言う仲間意識とは、仲間の危険な状態や苦痛や不安を感じ取り、それを庇う行動に出る群棲動物のもつ本能に溯源を発する共感や思いやりという感情とその周囲の心の動きのことで、意識ということばで表わすのは不適当なのかも知れませんが、うまい表現が思い当たらないので仮に意識と言っておきます。

このような仲間意識は一体感と

か、血のつながりの実感から出るものだと思います。その最も原始的なもの、母と子の間に見られます。と言っても、母の立場において子との間に仲間意識が強いので、子の方からはそれほど強くないのが普通です。それから、仲間意識は、家族・血族・親族などに

拡がり、いろいろな団体、地域的な集団、民族、同一国民、人種、人類、高等動物から下等動物へ拡がり、遂に草木など生物一般、そして遂に無生物・日月星辰にまで到ります。

むしろ、一人の人の各範囲における仲間意識の強さは平等ではありません。身近なものへの仲間意識は、遠いものに対するより濃厚であるのが一般です。

そこで仲間意識が原始的などころから段々にその範囲が拡がるということはどういうことでしょうか。私は、自覚の深さ、自分というものの理解の深さが増すにしたがつて、仲間意識の範囲が拡がるのだと思っています。

この仲間意識を拡げることが、個人がより安定した生活をするということにもなり、よりよい社会を作ることにもなるのだと思います。それは、釈迦・キリスト、あるいはそれ以前からよく知られ、多くの人々によって熱心に追求されてきました。そして、ある特定の人々の拡大に成功しました。しかし、特定の人がいくら拔群の深い自覚を得、広大無辺の仲間意識を得た

にしても、現実の人間社会一般は、あまりよくはなっていません。それどころか破滅に瀕するところまで来てしまいました。これについては、いろいろに言い訳的説明がなされていますが、従来のやり方だけではダメなのです。そこでわれわれは、全人類が一足飛びにそれほど徹底した自覚を得、天国を

実現し得ないまでも、人類の仲間意識の平均値を、当面の危機を回避することができる程度にまで高める可能な手段として、国に一つの理想を掲げよう、と提案しているのです。その際最も手強い妨害者は、国家——従来のエゴイステックな国家意識ですが、それに対してはその基本国是の訂正の主張によって切り抜けようと考えて

する、と書いてあるのです。

値段やお礼のことはさておき、最初の、自主性だの創造性だのをうたっている部分を見て私は実にイヤな感じがしたのです。

それはこういうことなのです。

まずこの文句を見て、自主性と想像力はデタラメだとしても、ともかく子どもに自分一人の部屋を与えることは教育的に大変よいことだといふこの広告の出張を額く先生や親が多いだろうと思つたのです。もしそうだとすると、それは私にとって最も嘆かましいことなのです。

このように物の豊富さによる便利快適をどこまでも進めることによつて効率的に教育の効果を上げようといふ発想が今日の教育世界

を風靡しています。そして教育の効果（？）を上げて人間をダメにしているのです。恐るべき教育公害です。

ものごとの眞実を見ず、浅はかな妄想で判断する人は、小さい弟妹に邪魔されたり、お客さまが来ると居る場所がなくなるようなところでは勉強できない、自分一人の部屋があつていつでも静かに勉強できる境遇の方が有利だと思つてでしょう。ところが実際はそんなものでしょうか。

誰にも邪魔されずぬくぬくと勉強する子は差し当たり学校の成績が多少いいこともあるでしょう。しかし長い目で見るとさういう子は、いずれ馬力のない意気地なしの青年になるに決まっています。

ひとければ登校拒否になるでしょう。それに引き換え、狭いところで不自由し、場所の取り合いで兄弟喧嘩しながら育つた子にはるかに自主性も創造性も豊かに得て自信を持った青年として押し上がってくるでしょう。

これは住居だけの問題でなく、生活のあらゆる面で同じような間違いを犯しそれに気づかないのが現在の政府だと言えらると思ひます。

快適として能率。これが文明の狙つてきたところであるし、文化もその文明に乗つてもたらされたものです。ただ文化は自然のいのちを離れず常にそこへ回帰しながら発展してきた面を多く持つているから一概には言えませんが、文明「科学文明の方は自然のいのち

のたくましさを振り返りもせず、ただ人間の欲望の命ずるままに突っ走ってきたので、それによつてもたらされた便利快適が人間にとつて果たしてプラスなのかマイナスなのか簡単には判断することはできません。

しかし今日問題になっている産業公害とか自然破壊、原水爆などのような大きな問題は別にして、我々の子どもたちの人間としての幸せを考へる時、文明のもたらした便利快適が決して味方にばかり働いてはいないという事は明らかでしょう。そればかりではなく明らかに害として働いていることが無数に目につくではありませんか。

ぜいたくな着物をブクブク着て、暖房の効いた部屋に住み、栄養豊

かな飲食物を摂り、カゼを恐れて寒い風にあたらぬよう気を付け、それでもカゼをひいたら薬を飲んで食欲をなくし、そこで食欲増進の薬を飲んで胃腸の自力を弱め、青白くなったといつては日焼けの工夫をする。……学校で今日使っている教科書の行き届いた親切さには驚かされます。子どもたちは何も考えずにただ書いてあることを覚えればよいことになっていきます。おかげで子どもたちのアタマは錆びついて回転が極度に鈍くなっています。彼らの持っている知識は貯蔵されているだけで殆ど活動しないのです。あまり行き届いた材料で、行き届いた教え方をしてくれるので、子どもたちは自分の頭を働かせる必要がないのでし

よう。……乗り物が発達普及したから子どもも大人も足を使わない。ひよるひよる伸びて足を支える腰には力がなく少し大きなものがぶつかってきたらばひとたまりもなく尻餅をついてベソをかきます。これと同じ現象が精神力の面でも現れてきます。困難に真っ向から立ち向かうという気概が青少年にどんどん無くなってきました。

このように人間が一生懸命になつて数千年もかかつて築いてきた文明がこのままの調子でさらに進んで行つたらどういふことになるでしょう。近い将来に人類という生物は急激に衰微するであろうことは多くの人々が確信を持って言うところですよ。

それでは文明によつてもたらさ

れるこの害を有効に防ぐ方法があるだろうか。まず文明を捨ててせめて百年昔の状態に戻せばよい、と思います。それはまったく不可能な空論です。自動車公害が叫ばれて人々は自動車の未発達時代のなつかしがりです。それでも今となつてはそれを捨てることできません。新幹線の味けなさを口々に嘆きながらそれでもその便利さにはかたがたしません。何から何まで悪いと知りながら目の前の便利快適を捨てることのできないのが人間というものでしょう。

それではどうなるのか。結論としては減じるより他は無、となります。人間が自然を切り取り切り崩し、変質させてしまつて文明を進め自らもいのちの自然から離

れてきてしまつたのですから人間が苦しみながら減じるのは止むを得ません。この文明の害をきれいに切りぬける道は所詮無いと言わねばなりません。——それではあんまりではないか、と思いますが、それでも事實は事實として認めないわけにはゆきません。われわれは、煎じつめてみればどうにもならないこの文明の中で、出来る限りの知恵を絞つて少しでも減亡を遠くへ押しやり、悲惨さを少なくする努力をするより他に道はありません。それが人類がこの世に出現した意味であり、人類が負う宇宙的役割だと思ふのです。その役割を忠実に果たさうとするとき、そこに全く思いがけない道が開け

ないとは断言できませんが。

話が人類という大規模なところへ行つてしまいましたが、我々個人々々もその逃れることのできない文明の中にあつてなおその害から少しでも遠ざかる努力をすべきだし、その努力を忠実にしてゆくことによつてへこの地上の生を悔いなきものにする事ができるのだと思ひます。またそのことを子どもたちの生活に当てはめて、ただ無反省に快適便利、目先の能率を追ふことなく、彼らの長い人生を力強く充実したものにする方向へ目を向けていきたいものだと思ひます。

(以上は二月十五日の西湘まみず会
のときの話の内容の一部です)

集會に一工夫を

二月の西湘まみう会の集まりにはずいぶん遠くからめずらしい方々が大勢参加してくださり大変盛會でした。これは主催者側としては嬉しいことですが、その反面せっかく遠方から参加してくださいました方々が、「わざわざ来た甲斐があった」と満足してくださいましたかどうか心もどなく思つのです。

それはみなさんに気軽に口を開いてもらえるような気楽な雰囲気を作ることができなかつたという憾を覚えるからなのです。みなさんは必ずしも人の話を聞くかと思つておいでになつたのではないと思ひます。座談会なのですか

らお互いに氣づいたことを楽しく話し合えると、なんとなく期待はしておいでになつたのだと思ひます。それなのに実際はほとんど初めから終わりまで私一人がしゃべつてしまつたようなものです。結局大部分の方はただ講演を三時間も聞かされたようなことになつてしまつたのでした。私は途中で何度か氣になつて話を切りました。そしてどなたかの発言を待ちました。がシーンと静まりかえつてますます重苦しい雰囲気になつていきます。仕方がないからまた私がしゃべり始める、といったことを繰り返したわけです。

これではいけないと思つのです。誰でも気軽に思ふことを言つて、もっと楽しい雰囲気を作り上げた

お知らせ

知能についての勉強會

主催 はじめ塾

日時 五月十四日(金)

六時より十時まで

講師 伊藤隆二先生

(神戸大学教授)

申込 なるべく早くはじめ塾へ

自分の子どもや教子の中に時々普通の常識では理解しがたい先進的な状態や変化を現すものがあります。その中で一

般に多く取り上げられているのは、主として性格とか情に關すること、知能の面で取り上げられてきたのはいわゆる精神薄弱（知恵遅れ）だけのように思いますが。ところが我々が子どもや青年に接しているところほとんど全面的な異常ではないが、どうも理解しがたい、しかもそれは明らかに知能の領域の問題だろうと思われる現象に遭遇することがしばしばあります。例へば近年多くなっている現象に、小学時代は勉強がよくなった子が卒業近く、あるいは中学生になると急に頭腦が凝固してしまったのではないかと思われるような状態に陥るといのがあります。環境的にも身体的にもこれという原因も考えられないのです。彼らに共通なことは、自分で自分の変化を意識していないらしいということです。そして前の通り比較的よく勉強を続けているので学校の

成績も下がるには下がらなければならない子どもや学生になるというほどではないから先生も親も大して問題にしないようです。ただわれわれはその頭の働きの急に鈍くなったことに気づき気が毒に思うのですが、その変化の意味や原因が分からないので手の施しようがないのです。

悪い方はかりではありません。目が覚めたように急に頭が活動し始める子どもにはあります。

大小様々な理解しがたい事実がありますが、それらの実例を持ち寄って、今日の学問からはどのように理解されるのだろうか、そしてできれば教育の現場でどのようにしてそれを活用することができらるであろうか、などをその道の専門家を囲み膝つき合わせて質疑応答を重ねて勉強しようという会です。

講師の伊藤隆二先生は新進気鋭の心理

学者、しかも知能についての専門家です。本でもトップレベルに立つ方です。非常にお忙しい方ですが、この企画に賛成して講師の役を快く引き受けてくださいました。

どうか、めったにない機会ですから、親御さんや幼稚園保育園の先生方、小学校中学校の先生方など問題を携けてお集まりいただきたいと存じます。

なお、あまり人数が多くなると講演会のようになって内容の濃度が下がりますので定員は二十名ぐらいが限度かと思えます。会費はどうしたらよいかまた考えが決まっておりますが、もしいただくとしても一人二千百ぐらいのところをいせいではないかと思っております。

昭和五十一年二月

はしめ塾

和田重正

ないのだと思います。従って他人に聞いてもらう意味があるかどうかは甚だ疑問です。しかし、自分にとっては遊びと同様何ものにも替えがたい貴重なものなのです。

ですから遊ぶ、という奇妙なことを書いたついでにもう一つそれを付け加えさせてもらいます。学術雑誌や厳格な専門雑誌でない本誌にはたまには夢のようなことが載っても悪くはないと思いますので。その感じを浮き上がらせるために二つの話をしなければなりません。

1 むなしさの中で

何もかもむなし。むなしくないことはない。——こう言ってしまうってはむなしさの実感が出ませんが、一つ一つの自分の営みをよく味わってみると、むなしくない

ことはない、と結論せざるを得ません。金や地位や名声のむなしさは誰でもわかるでしょうが、私は愛情を求めることも、真と善と美を追求することにさえも底無しのむなしさを覚えるのです。これは私の偽らざる実感なのです。

むなししいとは空や虚の字をあてることからそれは実がないという意味だと思ってしまう。全く何もかも実のあること、確かさのあること、どこまで行っても手応えの消えないこと、——そんなことは何一つとしてないとは思われないのです。

でも、それでは困ります。生き甲斐が感じられるはずがないのですから。何か頼りになるものを得たいともがきます。(以下原稿不明)

後記

「世界でこんなことも起こるんだ」。ネホサの提案を読み直しながら、あちこちの戦争の行く先を見守っています。

手書き未定稿——多くの方々がご自分の生きる姿と重ねながら味わっていられるのではないでしようか。

平澤 正義

和会機関誌 『ここに帰る』 第89号 令和8年4月1日 発行 発行者 〒399-3701 長野県上伊那郡飯島町田切1295 和田重正に学ぶ会 平澤 正義
和会機関誌 『ここに帰る』 http://wadashigemasa.com/